

ンケーキに肉類を初めとする消費すべき食材をすべて投入して焼くという習慣があった。今でもバッキンガムシャー州のオルニーという町では、地元の主婦がフライパンにパンケーキを入れて空中に投げつけてはまたそのフライパンで受け止めつつ走って順位を競うという 'Pancake Race' が毎年この日に行われている。

・fey: 「死にかけている人が、何事もないかのように起き上がって談笑している状態。」これはジョーディ (Geordie)、つまりニューカースル・アポン・タインおよびその周辺 (イングランド北東部) の方言である。『リーダーズ』には「異常にはしゃいだ、高ぶった《昔死の前兆とされた》; 頭の変な、気がふれた; 第六感のある、千里眼の; この世のものでない、異様な; 魔力をもった、妖精のような; 《スコ》死ぬ運命の、死にかけている。」とある。ジョーディ用法には言及していない。最後の「死ぬ運命の」は現在ではスコットランド方言だが、ルネサンス時代のイングランドを代表する詩人のひとりエドモンド・スペンサー (?1552~99) はこの語をこの意味でたびたび用いている。それにしても、ニューカースルあたりでは死にかけている人が起き上がって談笑するということがよくあるのだろうか。それが気になったので、ニューカースル大学に留学していた友人に頼んで、彼の地に生まれ育った人にこのことについて訊いてもらった。すると、そのニューカースルの人は、'fey' という単語を「死ぬ運命の」と「狂ったように興奮して」という意味でのみ知っていた、とのことである。私がある本で見つけた「死にかけている人が、何事もないかのように起き上がって談笑している状態」という情報が間違っているのか、あるいはジョーディといってもある程度広い範囲の方言なので (タイン川流域全体を含む)、ニューカースル境界以外の地域での用法なのか、今後調査を続行したいと思う。

電子辞書の使い方

経営学部

田川 光照

最近、電子辞書が急速に普及し、教室でも電子辞書を使っている学生の姿が多くみられるようになった。電子辞書には、もちろん長所もあるが短所もある。以下に、電子辞書を使うにあたって注意すべきことなどを述べておきたい。フランス語と韓国語を中心に述べるが、他の言語にも共通する点が多いので、これら以外の言語を履修している人もぜひ読んでいただきたい。

1. 電子辞書の長所

まず、電子辞書一般がもつ長所と短所についてまとめておこう。

長所としてまず第一にあげることができるのは、そのコンパクトさと携帯性である。とりわけ、複数の辞書を持ち歩かなければならない場合、電子辞書ひとつですむので非常に重宝する。筆者の場合、バスや電車の中で調べるために、また海外に出かける時のために電子辞書を持っている。

第二に、収録されている辞書間でのジャンプ機能はありがたい。とくに、たとえば和仏辞典や日韓辞典で調べたフランス語や韓国語の単語、表現などを仏和辞典や韓日辞典で確認する (日本語を外国語に訳すような場合にはこの作業を必ずしなければいけない) 時などに威力を発揮する。あるいは、仏和辞典や韓日辞典で調べた単語の日本語の意味が分からない時に、その意味を調べるのに国語辞典にジャンプするという使い方もありうる。

第三に、最近の電子辞書には音声データが入っているものも多く、単語や例文の発音を確認する

のに役立つであろう。ただし、これには注意が必要であり、それについては後で触れる。

2. 電子辞書の短所

次に短所であるが、まず第一に価格の高さをあげることができる。内蔵されている辞書すべてを利用するのであればそれほどではないが、二つか三つくらいの辞書だけを使うのであれば、紙の辞書を買ったほうがはるかに安くつくであろう。

次に、上に述べた長所の一つ目がそのまま短所にもなる。コンパクトで携帯性にすぐれているのはよいが、そのために画面が小さく、とくに重要な単語の全体像がつかみにくいからである。重要な単語はその意味範囲、使用範囲、用法が広く多様で、たとえば、フランス語の動詞《aller》を電子辞書で調べる場合、電子辞書によって異なるが、少なくとも4回はページ繰りをしなければならぬ。用例を見るためにはさらにボタン（キー）を操作して別の画面を見る必要があったりする。重要な単語ほど、紙の辞書で調べるほうがはるかに分かりやすいし、かかる時間も少なくともこの見通しの悪さは電子辞書が持つ宿命的な欠点であり、価格の問題よりもこの点が決定的な短所である。

3. 電子辞書を使用するにあたっての注意

(a) フランス語

上に述べたように、電子辞書の最大の欠点はその見通しの悪さにある。ところで、フランス語は語彙数が少ない言語である。語彙数が少ないということは、単語一つ一つの意味範囲、使用範囲が非常に広いことを意味する。たとえば《mettre》や《prendre》などを調べてもらえば、このことはすぐに理解してもらえらるであろう。したがって、こまめに行繰り、ページ繰りをし、かつ、たとえ用例が別ページになっていてボタン操作をしなければならぬとも、面倒がらずに用例もきちんと見る必要がある。

次に重要なことは、動詞を調べた場合にはジャンプ機能をフルに使うことである。ここで言うジャンプ

は辞書間でのジャンプではなく、動詞活用表へのジャンプである。かつての電子辞書にはこの機能がなかった。しかし、最近のものにはすべてこの機能がついているはずである（もしこの機能がなければ、その電子辞書は買わないほうがよい）。フランス語の勉強は動詞の活用についての勉強であるといっても過言ではない。動詞の法・時制・人称変化の確認を怠ってはならない。電子辞書を使っている人は、どのようにすれば動詞活用表にジャンプできるか、説明書を見て必ず確認していただきたい。

最近の辞書には発音も聞けるようになっているものが多い。しかし、それはほとんど見出し語だけなので、あまり意味がないと思っていただきたい。見出し語の発音を聞いても、その単語が実際に使われる時にはエリジヨンやリエゾンなどの関係で、さらに動詞の場合には変化する関係で、その見出し語の発音そのままではよいとは限らないからである。綴り字と発音との関係など、基本的なことがらをしっかり勉強し、覚えていくことが重要である。そのための補助手段としてであれば、電子辞書の音声聞くのもある程度有効であるかもしれない。

(b) 韓国語

韓国語についても、フランス語の場合とほとんど同じことが言える。

まず、韓国語もフランス語ほどではないにしても、たとえば英語などと比べれば語彙数は比較的少なく、《가다》《오다》などを見れば分かるように、重要単語の意味範囲や使用範囲は非常に広く、こまめに行繰り、ページ繰りを行い、用例もきちんと見る必要がある。

フランス語の場合と同様、用言、とりわけ変則用言を調べた場合には、活用表にジャンプして確認するのが望ましい。現在出ている電子辞書にはたいていこの機能がついているはずであるが、自分の持っているものにこの機能がついているのかどうか、また、ついている場合にはどうすればジャンプできるのかを確認していただきたい。

辞書で発音を聞くことができる場合、次のこと

に気をつけていただきたい。フランス語の辞書の場合と同様に見出し語の発音しか聞くことができず、さらに辞書の発音を聞いても平音、激音、濃音の区別が分かりにくいだけでなく、次のような事情があるため、あくまで参考程度にとどめるべきで、それを頼りにすべきではない。韓国語は音の変化がきわめて激しい言語で、たとえば、体言の場合には助詞との間でのリエゾン（連音）が起こったり、用言の場合には語幹と語尾との間で音の変化が起こったり、語幹そのものが変化したり、その他さまざまな音の変化がある。したがって、見出し語の発音を聞くだけではほとんど役に立たない。文字と音との関係をしっかり理解し、音の変化に慣れることが重要で、この点では電子辞書の発音はほとんど役立ってくれないのである。

なお、初級の韓国語学習者にとっては、紙のものよりも電子辞書のほうが使いやすい面があるかもしれない。というのは、紙の韓日辞典を使う場合、辞書でのハングルの配列順序が頭に入っていないと調べるのに時間がかかるが（もともと、四苦八苦しているうちに慣れて、さっと調べられるようになるが）、電子辞書の場合にはキーボード（スクリーン・キーボード）を見ながら、ハングルを打ち込んでいけば、辞書でのハングルの配列順序を知らなくても調べることができるからである。とはいえ、辞書での配列順序を知らないと、電子辞書に入っていない辞書を調べなければならなくなったような場合に困ることになるから、覚えなければならないが。

以上、電子辞書を使うにあたって気をつけるべきことをざっと書いた。電子辞書はうまく使いこなせば非常に便利で役立つが、使い方を誤ると、学習にとってマイナスになりかねない危険をも持っている。繰り返せば、コンパクトさ、携帯性が電子辞書の最大の長所であるが、この長所ゆえに見通しの悪さという重大な欠点を免れることができないのである。もしお金に余裕があれば、家では紙の辞書を使い、持ち運びには電子辞書を利用するというのが理想的な使い方である。

2人の老人、中国周遊

対外経済貿易大学教授・愛知大学客員教授
賈 保華

昔から中国には「読万卷書、行万里路」（万卷の本を読み、万里の道を行く）という諺がある。読書と旅行が互いを補完しあい、本から得た知識と実社会から得た経験をもとに、人生を充実させる、という意味である。そして、本ばかり読んでいても駄目だ、外の社会を見なきゃ、という意味も含まれる。

しかし、大多数の人にとって、旅行するにはやはりお金と時間が必要である。特に長距離と長期間の旅行なら、それが必須条件となる。しかし、最近中国では2人の年配者が大したお金も使わず、自転車や徒歩で全国一周という記録を作った。

まず、1人目は甘肅省蘭州市の64歳の男性、蘇徳祥さん。甘肅新聞網10月25日の報道によると、に蘇さんは全国22の省市にわたる自転車旅行を終え、1,000以上の郵便スタンプが押された記念帳と10万字におよぶ旅行記を持って、9月25日蘭州市に戻った。中国の自転車旅行では7万里（=3.5万キロ）の新記録だという。

停年前、蘇さんは同市のある会社の幹部であった。若いときから全国周遊の願いを持っていたが、仕事が忙しく、なかなか暇が無かった。

停年後、かれは全国旅行の準備に取りかかり、2004年4月12日、一台の自転車で蘭州から夢の旅へ出発した。2005年9月までの18ヶ月の間に、彼は人気が無く寂しいゴビ、砂漠、草原も歩けば、賑やかな沿海都市も観光した。この旅行では合わせて22の省、市と自治区を周り、ほぼ2万元を使った。